

〈中本正智博士 著書紹介〉 『日本語と中国語の対照研究』

橋尾, 直和

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

95

(終了ページ / End Page)

97

(発行年 / Year)

1995-02-24

# 『日本語と中国語の対照研究』

橋 尾 直 和

本書は、国際化にあたり、日本語教育がますます大切になっている現在、日本語の構造を理解するのは当然であるが、日本語学習の母語にも理解を示し、両語の対照研究を深める必要から書かれたものである。日本列島の周辺には中国大陸をはじめ、朝鮮半島があり、さらに南の国々がある。全アジア的視野にたってこれら諸言語との対照研究を行うべきであると、手はじめに日本国と中国の対照研究を深め、両言語の特徴と差異を明らかにすることを目的としている。中国大陸の南北、及び周辺言語との比較対照のために必須と考え、アクセント記号と国際音声記号を用いて表記しているのが特徴である。

第1章「中国文化のあゆみ」では、中国文化の流れを、古代から1949年の中華人民共和国誕生に至るまでかいつまんで説明している。

第2章「ことばのやりとり」では、人間の本能的な行動であることばのやりとりを、大陸文化を育んできた中国と、列島文化を育んできた日本との、対蹠的な地理的条件を考慮し、言語生活が文化的な背景とどのように深い関係を持つのかを分析している。

たとえば、昼間、道で人に会った時、かわすあいさつことばは、次のような差となって現れる（以下、アクセント記号・国際音声記号省略）。「今日は。」／吃过了？

日本語の「今日は」は、あとに続く述語の「良い天気ですね」とか「雨ですね」など天候について話している部分が略されたもので、日本人は天候について考えることが多いが、中国語では「吃过了」（お食事は済みましたか）といった具合に、食事時を大切にし、人に会う時邪魔しない配慮から生まれたものである。このような、あいさつことばの差について分析している。

第3章「語と意味」では、まず、日本語では「格」と「が」「に」「を」で表現するが、中国では「山」の位置によって、これを表現するとし、これらの対比から言えることは次の3つであるとしている。

(1) 日本語も中国語も名詞は形が変わらない。(2) 名詞が文の要素となって格を表すとき、日本語は助詞をつけ、中国語は位置を変える。(3) 述語は、日本語が活用して文法的意味を表すのに対し、中国語は語順によったり、または文法的要素を加えたりして文法的意味を表す。

さらに、言葉の表現は、意味のまとまりを基盤にしてなされるとし、意味のまとまりには、次の3つの段階があると想定している。これらの意味のまとまりをてがかりに、日本語と中

国語の対照分析を行っている。

第一は、語である。「山、河、海」のような名詞のほか、動詞、形容詞、副詞など一つ概念を形づくっているものである。複合語は複数の概念が一つ概念をつくったものである。第二は、句である。「高い山」のように、語である「山」に、いろいろな修飾語や文法的機能を与えて、「山」の概念を変えていったもの、あるいは「山に」「山を」のように文法的機能をもたせたものである。第三は、文である。「山が高い」のように、表現者の判断が加わった一つの完結した表現をとったものである。

第四章「句のつくりかた」では、修飾関係についてのパターンを、名詞と名詞、形容詞と名詞、動詞と名詞について、それぞれ多少分析を行っている。たとえば、名詞と名詞においては、「私の父」／我（的）父亲、「私たちの学校」／我们（的）学校などのように、親族関係であったり、学校や社会への所属関係いあったりするとき、日本語の「の」は省くことができないが、中国語の「的」は省くことができる、としている。

第5章「文のつくりかた」では、「1. 表現のいろいろ」において、基本文型、願望の表現、様態の表現、推量の表現、過去と完了の表現、アスペクトの表現、疑問の表現、応答の表現について対照分析を行っている。使役の表現において、日本語では他動詞文の場合、相手を「に」格で示し、「～に～させる」となり、自動詞文の場合、相手を「を」格で示し「～を～させる」となる。中国語では「叫」、「让」、「使」で表す。古語では「教」もあったが、「叫」と同音語であるため、現代では「叫」を多く用いる。例文中の「叫」はすべて「让」と置き換えることができるが、「使」と置き換えることはできない。「使」はやや硬い表現で、口語では感情動詞に用いる傾向がある、としている。

アスペクトの表現において、日本語では動詞に「ている」をつけて状態を表すけれども、中国語では状態は形容詞だけで表現することが多い、と説明している。たとえば、次のような例である。「山道が、曲がりくねっています。」／山路迂回。

また、日本語では、瞬間動詞に「ている」がつくと結果態となるが、中国語では、これらの結果態は「V着」で表現する。すなわち中国ではそれぞれ、進行態を「在V」で、完了態を「V了」で、結果態を「V着」で表現する、としている。次のような例は、日本語は結果の持続としてとらえているが、中国語ではある動作の完了としてしかとらえられない、としている。「李利さんは、結婚しています。」／李利成家了。

応答の表現において、日本語では応答の内容が肯定的であるときは「はい」を、否定的であるときは「いいえ」を、どちらも判断できないとき「さあ」をつける。中国語ならば、肯定は「是的」、否定は「不」をつける。判断不可能なときは、日本語の「さあ」のような決まった表現がなく、判断不可能であることを状況に応じて、説明的に述べるだけでよい、と説明している。

「2. 格、強調、取り立て、例示」では、主格、対象格、場所格、目的格、相手格、基準格、引用格、道具格、方法格、原因格など、起点格、原因格、材料格など、基準格、強調、

例示、限定、不確定、度数、均等、対照、帰着点について分析が行われている。

たとえば、主格においては、日本語で「象は鼻が長い」のように全体の「象」と部分の「鼻」を表すのに「～は～が」の構文をとるが、中国語では次のように表現する。

「象的鼻子长」。このように、中国語では、「象は鼻が～」の表現を「象の鼻が～」と表現する。強いて「象」をとりたてたいとき、そこを強く発音して強調のイントネーションを置けばよい。日本語の「が」格にたつ語は、知覚や認識の対象であったり、可能の対象、感情の対象、入要の対象であったりする。これらに対する中国語は、主格の位置にたたず、補語か客語としての位置をとる、と説明している。

第6章「音声とアクセント」では、「1. 音節」において、日本語と中国語の音節構造を対照分析し、中国語の音節は日本語より複雑で、もっとも大きな特徴は、いわゆる韻尾N、 $\tilde{G}$ をともなう音節が多いということである。それには、nとŋがあり、音節的に明確に区別されている、と説明している。

子音の説明では、日本語では破裂音が無声子音のp、t、kに対して、有声子音のb、d、gが対立して語を区別する力をもっており、p、t、kは軽い気音をともなう発音である。これに対し、中国語では無声子音と有声子音の対立がなく、代わりに無声子音の中で有気音と無気音が対立している。中国語では、有気音のp、t、k、tʃ、ts、tsと無気音のp<sup>ʰ</sup>、t<sup>ʰ</sup>、k<sup>ʰ</sup>、tʃ<sup>ʰ</sup>、ts<sup>ʰ</sup>、ts<sup>ʰ</sup>が音韻的に対立しており、無声子音の中に2系列が対立していることになる。有声音のb、d、gなどの系列は存在しないことが大きな特徴である、としている。

第7章「中国大陸のアクセント」では、中国語のアクセント体系において、visi-pitchを用いて、北京語、広東語、温州語のアクセントについて対照分析を行っている。広東語のアクセントは従来6型とも9型とも10型とも言われ、定説がなかったが、語の高低関係だけを見ると、次の7型が認められる、としている。

高平型┌ 中高平型┐ 中低平型└ 低平型┘ 中上昇型┌ 低上昇型└ 高降型┘

また、広東語のアクセント型の特徴は、まず、大きく平板か、上昇か、下降かの3特徴があり、さらに、平板ならば、高平か、中高か、中低平か、低平かの区別があり、上昇ならば、中から高へと上昇するか、低から中へと上昇するかの区別がある。いまひとつ高から急下降するアクセントがあるが、このアクセントを持つ語は高平のアクセントで発音することもできる、と説明している。

中国語のアクセントの対応では、広東語と北京語、温州語と北京語、温州語と広東語の対応について分析され、さらに古代漢語との対応について言及している。結語として、アクセントからみると、中国語は声の上げ下げが特徴であり、かつアクセントの機能が大きい言語であると言える。中国語でアクセントを失った方言は現存せず、日本語で無型アクセント方言が現存していることから、中国語と日本語のアクセント機能の差を説明できる、としている。

(文責：橋尾直和) (1991年3月20日・学術情報)